

新年記念俳句会優秀作品

平成二十四年 一月三十日

「年新た（年の始）」

天

賀状読み あの人想う 年新た
母となり 帰る故郷（ふるさと） 年新た

一人 静（荒澤威彦）
彦 吳（鈴木圀彦）

地

温泉に子等の声満つ 年新た
年新た 私の年だ 壬辰（じんしん）だ
年新た 願うは子どもの 歩む道

恵 介（滝口恵介）
彦^げ 山^{やま}（馬場信彦）
（長橋）

人

天災の 悪夢のりこえ 年新た
災害の なきよう祈る 年始め
年新た 弥彦登山で 元気よく
年始め 雪を踏みしめ 弥彦山
年新た 明日に向い 奮い立つ
ふるさとで のつぺ塩引 年新た
ゆずり葉に 御神酒の香り 年新た

一 陽（田中悌司）
喜 江 子（葦澤喜一郎）
喜 江 子（葦澤喜一郎）
範 夫（坂井範夫）
秀 夫（大溪秀夫）
一 夜 漬（嘉瀬 修）
武 酔（鈴木 武）

佳作

年新た 老いて感動 いまひとつ
年始め 子等孫共に 拝みけり
（年始め 子等孫共に 四方拝）

征 夫（丸山征夫）
武 酔（鈴木 武）

年新た 今年こそはと 宮参り
松の葉に 譲り葉添えて 年新た
年新た 願いて巡（めぐ）る 宮参り
年新た 改めぬこと ふたつ三つ
年新た 心も新た 前向きに
震災の 復興祈り 年新た
（震災の 復興祈りて 年新た）

宅 秀（佐藤秀夫）
吉 祥 老（渡邊久晃）
茶 奉 人（星野健司）
恒 輔（草野恒輔）
芝 遊（坪井正康）
芝 遊（坪井正康）
芝 遊（坪井正康）

年新た 炭火火鉢で 雪見酒
道つくも 雪に埋もれし 年新た
傷心を 癒すが如く 年新た
地震後の 復興進み 年新た
年新た 吉報願う 家族愛
年新た 無常の念い 胸に満ち
年新た 二年参りの 寒牡丹
年新た どこまで見ても 冬景色

一夜漬 (嘉瀬 修)
颯子 (熊倉高志)
彦 呉 (鈴木圀彦)
彦 呉 (鈴木圀彦)
愚 妻 (西卷克郎)
土 來 (広岡豊樹)
範 夫 (坂井範夫)
範 夫 (坂井範夫)

「焼鳥 (焼鳥賊)」

天

焼鳥や 屋台椅子の あたたかさ
焼鳥の 匂ひに襟立て 路いそぐ

彦 山 (馬場信彦)
征 夫 (丸山征夫)

地

焼鳥の 煙吹き出し 路地の角
焼鳥賊や 今日一日の 有難さ

武 醉 (鈴木 武)
土 來 (広岡豊樹)

人

火は紅し 祈りをこめて 鳥賊を焼く
(火は紅く 祈りと暖に 鳥賊を焼く)

芝 遊 (坪井正康)

焼鳥賊に ほのかに香る 潮の幸
焼鳥に 盃 (さかずき) すすむ 月の宵
焼鳥賊の 匂いに賑わう 浜の市

秀 夫 (大溪秀夫)
一 陽 (田中悌司)
(長橋)

佳作

雪夜道 焼鳥の香が なつかしや
焼鳥や 初顔合せの 宴 (うたげ) かな
焼鳥や お酒進んで 恵比寿顔
明き火に かざす焼鳥賊 香りけり
(左義長に かざす焼鳥賊 天昇る)

一夜漬 (嘉瀬 修)
喜江子 (葦澤喜一郎)
愚 妻 (西卷克郎)
颯子 (熊倉高志)

焼鳥の 残り一本 見つめ合い
焼鳥が あればなおよし 仲間酒
焼鳥や 匂う路地道 雪明り
焼鳥や 話はずんだ コツプ酒

恒 輔 (草野恒輔)
茶 奉 人 (星野健司)
恵 介 (滝口恵介)
宅 秀 (佐藤秀夫)

「寒卵」

天

温かな ご飯に月が 寒卵

(長橋)

地

病む母の 粥に涙の 寒卵

征 夫 (丸山征夫)

(病む母の 粥に涙と 寒卵)

寒卵 うまいと孫も 舌鼓み

吉祥老 (渡邊久晃)

元気出せ 元気だせよと 寒卵

彦 山 (馬場信彦)

人

おさなき日 病い平癒に 寒卵

宅 秀 (佐藤秀夫)

寒卵 食べて子ども等 春を待つ

恵 介 (滝口恵介)

(寒卵 食べて待つ子等 春の風)

病み上がり ひとときわ美味し 寒卵

茶 奉 人 (星野健司)

龍年の 勢い願って 寒卵

一 陽 (田中悌司)

寒卵 吐く息白き 朝餉かな

秀 夫 (大溪秀夫)

温泉に 誰ぞ忘れし 寒卵

颯 子 (熊倉高志)

(熱泉に 誰ぞ忘れし 寒卵)

湯気の中 白い顔して 寒卵

愚 妻 (西巻克郎)

寒卵 届けてありし 玄関に

彦 山 (馬場信彦)

ひとつ鍋 囲むや夕餉 寒卵

彦 山 (馬場信彦)

寒卵 百合根かまぼこ 蟹三つ葉

土 來 (広岡豊樹)

願い込め 生で食す 寒卵

爽 木 (佐々木常行)

寒卵 食べて元気に 辰年を

喜 江 子 (葦澤喜一郎)

寒空の 小屋に唯一つ 寒卵

吉 祥 老 (渡邊久晃)

選者吟

看 かん

雲 うん

(武藤昭三先生)

博識も 一つの美德 年新た

もてなしは 気負はぬ ハムと寒卵

焼鳥賊や 千の海波を 簣すにとざし

